
岬の住人

ノビタニアン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

岬の住人

【Nコード】

N2906D

【作者名】

ノビタニアン

【あらすじ】

不器用に生きてきた。朝は会社に行くために起き上がり、昼は陽を見ることもなくパソコンの相手をし、最終電車の明かりが消える頃、電車に乗り込む。食事を取ることも忘れ、時間の感覚がなくなった時、自分は機械になっていたことによりやく気付く。もはや自分の存在がこの世界から消えかけていると悟った僕は、波が打ち寄せる岬の上に立っていた。その人は言う。例えどんな形でも、自分らしく生きて下さい。

其の一

上手く生きることができなかった。

小学生で大人が信じられなくなり、中学生で人が信じられなくなり、高校を出る頃には自分を見失った。

今、振り返ってみると一人の時間が多かったように思える。

唯一、趣味と呼べるバイクで時々海を見に行った。

それだけが自分を人に近付ける手段だったんだと思う。

決して優秀ではなかったが、大学をなんとか卒業することが出来、ここから電車を一時間ほど乗り継いだところの小さな会社に就職もした。

朝、準備もままならない状態で家を飛び出し、一人がやっと立つことのできる快速急行に乗る。

鉛のような重く冷たい空気が流れる事務所で延々パソコンの相手をし、気付いた時には、もう日付が変わろうとしている。

最終電車のアナウンスが流れる駅で電光掲示板の明かりが消えるのを確認してから、再び電車に乗って朝へと戻ってゆく。

食事、というものは習慣ではなく、欲でもなく、ただ生きる為の義務として行っている感覚。

朝昼夜。どのタイミングで食事を取ればいいのか既に忘れていた自分は、コンビニに置かれている、今喉に通りそうなものをいくつか選んで体に無理矢理流し込んでいた。

機械。自分が機械になれたらどんなに楽だろう。

冷たい感情が支配し、時間を失った世界。

街を歩く群衆が皆のつぺら坊に見える。

今日も最終電車に乗って、暗く歪んだワンルームの扉を再び開いた時、自分の存在が既にこの世界から消えかかっていることに気付いた。

ようやく気付いた、と表現する方が今は正しいのかもしれない。
もう人間として生きてすらいないと悟った時、三年間繰り返し返した生
活を一枚の紙切れで終わらせることにした。

不思議なもので。

空になったはずなのに、自分の中に一つの欲求があったことを知る。
また海を見たい。

駐輪場で金食い虫に成り下がっていたバイクに命を吹き込み、勢い
良くアクセルを回す。

懐かしむように大きな音を立てて、バイクは僕を乗せて走ってくれ
た。

どれくらい走り続けたのかは覚えていない。

すっかり辺りが暗くなった頃、海が一望できる岬に僕は立っていた。
遠くに港町の明かりがうつすらと見える。

波の音は一定の間隔で、ザザー、ザザーッと鳴っていた。

夜の海はこんなにも不気味で、冷たくて、それなのに母の手の中の
ような深い優しさを感じる。

どこまでも続く闇がとても心地よい。そっと僕を包み込んで、無へ
と流してくれるようなそんなことを思う。

どうせ消えかった存在。これからの目標もなく、目的もない。
ついには生きる意味を見失ってしまった。

何もない。もう何もない。

ただここに残る肉体を葬ってしまえば、少しは楽になれるのだろうか。

切り立った岬に歩を進める。吸い込まれるような闇に体を預けよう
と。

ふと足元に目をやると一枚の写真が落ちていた。

これは…家族写真？

仲の良さそうな夫婦の間に制服を着た少女が写っている。

なぜこんなところに。
まさか。

岬から海を見下ろした。
波が岩場に打ち付けられる音しか聞こえず何も見えない。
ただ、そこには闇があるだけ。
闇がさつきより深さを増しているように思え、少なからず恐怖というものを感じていた。

「もし、その御方。」

後ろから声が聞こえ、驚いて振り返った。
そこには赤い提灯ちようちんを持って綺麗な着物を纏った老婆が立っていた。
僕は持っていた写真を、とつさにジューパンのポケットにねじ込んだ。

「宿はもうお決まりですかえ？」

赤い光が僕を照らす。

「いえ、まだ。でも宿を取るつもりは…。」

さっきまで人の気配など感じなかった。何時の間に。老婆の持つ提灯がユラユラ揺れて辺りを赤く染めてゆく。

「でしたら、お食事だけでも取っていかれたらどうでしょう。わたくし、この先にある宿の案内人しております。」

老婆はそう言って、海とは反対側を指差した。
小さな丘に、明かりが灯っているのが見える。
今まで気付かなかったが、かなり大きな建物のようにだ。

背の高い林からあれだけ顔を出しているんだ、間違いないだろう。自分が空腹を感じているのを知り、最後の晚餐も悪くないと思った。

「そうですね。夕食だけ頂いてもよろしいでしょうか。」

老婆はゆっくり頷いて歩きだした。

後について僕も歩きだす。

「あれ……。バイクは……。バイクがないぞ。」

岬に続く階段前に停めておいたバイクが無くなっていた。キーでハンドルロックもかけ、太い鉄のチェーンもしたはずなのに。誰かが持っていった？

いや、大型バイクだ、誰かが持ち上げるのは不可能だ。車やトラックで運んだとも考えられない。こんなに暗く、静かな場所だ。

車やトラックが近付いてきたらすぐにわかる。

じゃあ、バイクはどこに？

……。でも、もう必要ないか。帰る手段があっても仕方のないことだ。

「わたくしが来た頃には何もありませんでしたが。明日警察に届けてみてはいかがでしょう。小さな町です。どこかに置かれているならすぐに見つかるでしょう。」

老婆がそう言った後、暗闇の向こうから一筋の光が近付いてきた。
旧い形をした送迎バス。昔に家族と一度だけ温泉へ行ったことがある。その時に乗ったバスにそっくりだった。

「さあ、お乗り下さい。」

老婆が僕の背中を押す。

「あなたは？乗らないのですか？」

「わたくしは、案内人でございます。」

赤い光に照らされた老婆は、微笑みながら頭を下げた。

「どうぞ、ごゆるりと。お気の済むまま。」

バスはゆつくりと丘を目指して走りだす。

薄暗い車内から、暗黒の海を眺めると、改めてその不気味さと永遠の安らぎを与えてくれるような静寂さの共存を確かめることができた。

10分ほどだっただろうか。

林を抜けたその先には、見上げるほどの巨大な旅館があつた。

こんなところにこんなものが。

少々驚きながらも、感動に似たものを感じていた。

湯気が奥から立ち上り、全ての部屋に明かりが灯っている。

有名な温泉宿なのだろうか。

石畳の先にある玄関をくぐると、白く透き通るような着物を纏った女性が出迎えてくれた。

「ようこそいらっしゃいました。わたくし、女将の白羽はしろと申します。

」

「あ、さっき案内人の方に…。」

「話は聞いております。まずはお部屋に御上がり下さいな。」

そう言つて女性は優しく微笑んだ。綺麗な白い袖がヒラリと舞い、

思わず見とれてしまいそうなほど美しい人だった。

「でも…予約もしてないですし。」

「お部屋はございます。まずは温泉で汗をお流し下さいな。すぐにお食事をお持ち致します。」

こんな大きな旅館に予約もなしで？

外から見た時はえらく繁盛しているように感じたが。それほど部屋数があるのだろうか。

さぞかし、高いんだろうな。

財布を取り出し、思わずキャッシュカードを確認した。

「揚羽！お客様をお部屋に案内して頂戴。^{あげは}すぐに温泉に行かれるわ。」

女将がそう声を掛けると、奥の廊下からもう一人顔を出した。

「今違うお客様の退室の準備をしてるのよ！私は何人もいないんだから！」

黒に山吹色の水玉と、雨上がりの空をイメージさせる群青の水玉をちりばめた、艶やかな着物の女性が忙しそうにしている。

「なんて言葉使いを…。申し訳ございません。まだ新人なもので。」

「ああ、大丈夫です。」

黒い着物の女性が、小さなカバンを持って、そそくさとこちらにやってきた。

その後ろに続いて、もう一人、分厚いパーカーを着た少女の姿が。

「お客様お帰りになられます。バスは？」

「ええ、表に。」

黒い着物の女性は、少女にカバンを渡し、深々と頭を下げた。カバンを受け取る少女の腕には、包帯が巻かれていた。見覚えがある。

この人、どこかで…。

「お世話になりました。ありがとうございます。頑張ってみます。」

少女はそう言うにつこり笑って玄関を出ていった。霧に包まれたかと思うとすぐに見えなくなった。

「さ、お待たせしました。私、揚羽がお部屋へのご案内致します。」

よく見ると、女将によく似た、とても美しい人だった。緑の瞳をしたその人はどこか儚げで、不思議な雰囲気を持っていた。

これは、僕が過ごした、たった一夜の出来事。

「ようこそ。真世庵へ。」

其の二

揚羽と名乗ったその女性は僕を二階にある客室へと通した。

いくつものドアが並ぶ長い廊下。所々に海が描かれた水彩画が飾られており、床は驚くほど綺麗に磨かれていて、まるで鏡のようだった。

しかし建物の豪勢さに比べると、部屋は幾分か質素なもので小さな畳の間の先はガラス張りの大窓があるだけだった。

丘の上にあるだけあって、そこからの眺めは大したものであつたが。

「温泉は一階の突き当たりです。夕食はその後持ってきますね。何かありましたら呼んでください。」

白羽という女将に比べると、やはり揚羽の言葉は少し若者言葉が交ざっており、話すイントネーションもフワフワと軽い感じがした。失礼しますと襖ふすまが閉まる。

同時にこの部屋に静寂がやってくる。大窓から波の音が微かに聞こえている。

暗闇からザー、ザーと鳴る波の音、カタカタと窓を鳴らす風の音は、昔家族と来た温泉旅行を思い出させる。

懐かしさが込み上げ、しばらく海を眺めたまま動けなかった。

一階突き当たりに、男湯、女湯と書かれた暖簾のれんがぶら下がっている。僕は暖簾をくぐり、脱衣場に入った。

がらんとした脱衣場に人の気配はなく、着物入れが規則正しく並べられている。綺麗に整頓されている、というより何もない、という印象。

ここにたどり着いた時は、えらく繁盛しているように思えたのだが……。

温泉へと続く廊下も、異様に静かで誰ともすれ違うことがなかった。こんなに大きな旅館なら、それなりに従業員の数もいるだろうに。しかしここまで、僕の知っている人は女将の白羽、黒い着物の揚羽だけだった。

腑に落ちない部分を抱えながらも、混雑しているよりマシかと思い、服を脱ぐ。

ジーパンのポケットに手をつ突っ込むと、一枚の写真が出てきた。岬で拾った一枚の家族写真。

そういえばポケットに入れちゃってたんだな…。

その家族写真を再び見た時、さつき玄関での出来事を思い出した。この真ん中に写っている制服を着た少女。先程小さなカバンを抱えてこの旅館を出ていった少女。

少し痩せていて、私服だったせいもあり、さつきはわからなかったが紛れもなくここに写る少女本人だった。

よかった。生きてたんだな。本当によかった。

いつの間にか、誰かを心配できるほどの余裕が僕には生まれていた。

部屋に戻ると既に布団がひかれており、お膳に夕食が並べられていた。

さすが港町といったところか。

テレビくらいでしか見たことのない、新鮮な海の幸だ。

下の階から人の騒ぎ声が聞こえる。宴会でも開かれているのだろうか。

やはりたくさん宿泊客がこの宿にはいるようだった。

どういう流れで一泊することになったのかはよくわからない。気付いたら僕は部屋の明かりを消し布団に潜り込んでいた。

海が見たいと思った。

引き寄せられるようにやってきたこの岬で海を眺めていると、このまま身を投げてしまいたい衝動に駆られた。

このまま消えてしまっても…そう思った。

その時、突然現れた老婆に赤い光を照らされて…。
風が強くなって波が荒れている音が聞こえる。
なかなか眠ることができない。

（もう0時過ぎか。）

僕は起きだし、何か飲み物でも、と思い廊下に出た。
相変わらずシンと静まり返った廊下。淡い光が道を照らしだし不思議な感じがする。

一階のロビーに腰掛けてペットボトルのキャップを回す。

風はどんどん強さを増し、玄関の戸をガタガタと鳴らしている。
海の夜はこんなにも荒々しくて、人を不安にさせるのか。僕の闇に
スツと入り込んでくるようで、少なからず恐怖というものを感じて
いた。

「どうかしましたか？」

暗闇から誰かの声が聞こえた。
揚羽がこちらを見て優しく微笑んでいる。

「ちょっと眠れなくて…。」

揚羽はフフと笑うと僕の横に腰掛けた。甘い花のような香りがす
る。改めて見ても本当に綺麗な顔立ちをしている。透き通った緑色
の瞳が僕をじっと見つめていた。

「さっきはごめんなさいね。」

「やっき？」

「ほら、あなたが旅館にやってきた時。私バタバタしちゃって。」

「ああ、かまわないよ。繁盛してるみたいだね。」

揚羽は笑った。

片方だけ生えた八重歯。

この人はこんな風に笑うのか。まだその笑顔には無邪気さの欠けが残っていた。

「あなた、学生さん？」

「いや、とつくに卒業しているよ。一応は社会人。今は社会人だったと言ったほうがいいかな。」

そうだったんですね。

揚羽はそう言って一つ呼吸を置いた。

「あなたもまた、道に迷っているんですね。」

「え？」

「今日ご退室された女性も、あなたと同じ。迷い人でした。学校でひどく辛い経験をされたようで。でもその人はここで新しい自分に出会うことができたみたいでした。」

やはりあの時の少女は自分と同じ、一度あの岬から身を投げようとしていたようだった。腕に巻かれた包帯も、恐らくは、その辛さの傷跡…。

「そうだ、これを。ここに来る途中に拾ったんだけど。」

僕は写真を取り出す。

「これは。わかりました。こちらで預かっておきます。あの人にとつてとても大事なものだと思います。これこそ、あの人に新しい自分を与えた存在ですから。」

揚羽はそう言って写真を受け取った。

「あなたの存在の証明って、何だと思います?。」

緑色の瞳が再び僕を見つめる。

「存在の証明?。」

「私の場合はこの場所がそうです。今はそう思えます。私、ほんとは演劇をやりたいかったんですよ。中学も演劇部で。高校でも演劇をやろうと思ってたんです。舞台に立つのが夢で。でも、ここが私の実家だから。」

「後継ぎ…か。」

「一人娘ですからね。」

揚羽は無邪気に笑っている。

「この旅館も忙しくなつて、人手も足りなくなつて。高校も中退しちゃったんです。私もこの旅館に入るために。」

「そうだったんだね。」

「はい…。」

伏し目になった揚羽が急に大人びた表情を見せた。
白羽さんによく似ている。

「私の場合、最初から歩く道が決められていた。ただそれだけです。」

「でも、君のやりたいことは？」

「私にとって、それが必要なものだったのかはわかりません。今もずっと。でもお母さんにとって私が必要な存在でした。もちろん私にとっても。だから旅館に入る覚悟もできたんだと思います。今はここで働けてよかったと思っています。あなたにも、こうして会えて話すことができました。」

自分は随分小さなことで頭を抱えていたのだと感じた。まだ若いこんな子でさえ、自分を受けとめ、運命を受けとめている。
僕はこの先が見えなかったんじゃない。見ようとしていなかったんだ。

強く自分を生きる揚羽は、僕よりずっと大人びて感じる。

「これから…見つかるかな。自分の存在する意味を。」

「あなたが望むのなら。迷ったら少し休んでまた歩けばいいだけです。まだ無限に道は広がっていますよ。」

揚羽は再び僕を見つめ、優しく微笑みかけてくれた。僕の中の闇がゆっくり中和されはじめ、晴れやかな気分を与えてくれる。

揚羽の言葉、一つ一つに強さを感じた。

その気付かせてくれた言葉こそが、僕の生きる証明のきっかけになったのかもしれない。

「揚羽！宴会場の片付けは終わったの？」

奥の廊下から白羽さんの声が聞こえた。

「あ、やば！お母さんだ！すぐ行きます！」

揚羽は急いで立ち上がり深々と頭を下げた。

奥の廊下に消えていく揚羽。振り返りざま、揚羽は最後にこう言った。

「例えどんな形でも、自分らしく生きて下さい。」

黒い着物をひるがえし、そのまま夜に溶けていった。

ちりばめられた水玉が更に色を増し、美しく闇に冴える。

それはまるで、夜空に浮かぶ揚羽蝶のようだった。

終話

いつの間に眠ってしまったのだろう。

遠いようで近くにある記憶が頭の中をチラついている。

浅い眠りだったのだろうか。夢を見ていたようだった。

夢の中で僕は、花が咲き乱れる草原に立っていて、淡く光る無数の蝶が舞っている。

月の光がこの場所を照らしだし、幻想的な世界を作り上げていた。

「あそこに揚羽蝶がいるよ。」

「ほんと。綺麗な蝶々ね。」

「ほら、あそこには紋白蝶もんしろも。」

まだ幼い自分が母と父に手を繋がれて無数に舞う蝶を見つめていた。とても懐かしく、暖かい夢だった。

目を覚ますと、僕は岬にいた。

打ち寄せる波の音がすぐ近くで聞こえている。

（確か昨日は旅館に宿泊したはず…。）

まだ朦朧もうちゅうとする意識。絡まる記憶に僕は混乱していた。

（なんでここに…？）

昨夜、揚羽の後ろ姿を見送った後、外の風が止んで再び夜が静寂を取り戻していた。

自分らしく生きて。

その言葉に勇気もらい、もう少し頑張ってみようと決心した。そこまでは確かに覚えている。

しかし、その後の記憶が全くない。自分がどうやって部屋に戻ったのか。どうやってここまで来たのか。一体、どこまでが夢だったのだろう。

振り返ると、階段前にバイクが停まっていた。昨日はなかったはずのバイク。

キッチンとロックもかけられており、動かされた形跡もなかった。狐に包まれる感覚、というのはこういうことなのだろう。

首を何度も傾げながら僕はバイクにまたがり岬を後にした。

朝焼けに輝く海は、昨日の表情とは打って変わって希望に満ちているようだった。

まるで僕の背中を押すように。

それから僕は、実家に戻り再就職をした。

と言っても、今は田舎で農家を営む父と母の手伝いをしているだけで、前みたいに組織に属しバリバリ働いているわけではない。

しかし、日が昇ると畑に出て、日が沈む頃には家に帰って家族の時間を過ごす。質素であったが、人間らしい生き方が戻って僕は満足をしていた。

就職する前は考えてもみなかった。田舎での農家暮らしを。あんなに嫌がっていたはずなのに。

これが揚羽の言っていたことなのかもしれない。

それならば揚羽のように生きてみるのも悪くはない。

これが存在の証明なら。

5年後。

僕は実家を継いだ。

両親はとても喜んでくれた。見合いで結婚もした。

親は仕事を引退し、これからは僕達夫婦がこの畑を守っていかなくちゃいけない。

新しい自分が新しいレールの上を走りだす瞬間だった。

ある日、たまには二人で旅行でも、と言う両親の言葉に甘え、僕達
はあの岬を見下ろす旅館へと足を運ぶことにした。
新幹線に乗って、そこからタクシーで30分ほど走ると、懐かしい
港町が見えてきた。

岬は、今も変わらずあの時のままだ。

「あ、この辺でいいです。」

僕が財布を取り出すと、タクシーの運転手は不思議そうな顔をして
僕達夫婦を覗き込んだ。

「お客さん、この岬に観光でも来たのかい？」

「いえ、あの丘の上の旅館に宿泊するんです。古くさい迎いのバス
がここまで来るはずなんですが。」

タクシーの運転手は静かに頷くともう一度車に乗れと僕らに言った。
迎いのバスで旅館まで行きたいという僕を、お代はいらないからと、
半ば強制的に車に押し込み再び走りだした。

バスで旅館に向かった時は生い茂る林の中を進んでいったように感
じたが、今回は綺麗に整備された道を10分ほど走ると丘の上につ
いた。

妻が窓から身を乗り出し、不思議そうに問う。

「ねえ、旅館はどこ？」

一番驚いていたのは自分自身だ。ここにあつた巨大な建物は跡形も
無く、ただっ広い草原が広がっているだけだった。

「あれ、ここにあつたんだよ。大きな旅館が…。」

そう言う僕を見て、タクシーの運転手がゆつくりと口を開いた。

「確かにありましたよ。でもそれは20年前の話です。」

20年前？

そんなはずはない。

僕は確かに5年前、ここの旅館にたどり着いた。そして旅館に宿泊したんだ。

温泉も入った。夕食も食べた。白羽という女将が出迎えて、揚羽という娘と話もしたんだ。

ただ不思議そうに僕を見つめる妻と、再び狐に包まれたような顔をする僕。

「たまにね、いらっしゃるんですよ。ここに宿泊したって人が。」

タクシーの運転手は窓の外を眺めながらこう続けた。

「あなたはここに泊まって、こうしてここにいる。感謝すべきことですよ。さて、行きましようか。別のお宿をご紹介します。」

そう言うって運転手は再び車を走らせた。

僕は振り返ってもう一度、あの旅館が建っていた場所に目をやった。草原の真ん中に一匹の揚羽蝶がヒラヒラと舞っているのが見えた気がした。

丘を降りて海沿いの道路を走りながら、運転手はこの町に伝わる不思議な話をしてくれた。

「天野六輔という人がいましたね。昔あそこで温泉宿を経営していたんです。その人はたくさんの珍しい蝶を庭で飼っていて、それは

それは美しい宿だったと聞いております。特に水玉模様をした幻の揚羽蝶がいると巷で噂になり、毎日たくさんの観光客が幻の蝶を一目見ようと宿を訪れていたそうです。しかし、あの岬で一人の人間が身を投げたことから、いつの間にか岬は自殺の名所として有名になってしまいました。なんでも身を投げた人は夜中に幻の蝶を見たとか…。それから不吉な蝶の噂が流れ、客足はぱったりと止まってしまったそうです。噂が噂を呼び、ついには町が動きました。主人は幻の蝶などいない、ただの揚羽蝶だと主張しましたが、死を呼ぶ蝶は町のイメージを壊しかねないということで20年前、ついに宿の取り壊しが決まったのです。死を呼ぶ蝶使いと町民から呼ばれるようになった天野六輔は、町を追いやられることになり、最後に自らあの岬で命を断ってしまったのです。」

車内の空気は重く、妻が怯えた表情で僕の手を握っていた。

「じゃあ、あの旅館は、一体…。」

「まだ続きがありましたね。取り壊されてからも、ちよくちよくあの宿に泊まったと言う人が現れるんですよ。つい最近も女性の方を乗せたんですけどね、言うんですよ。さっきあの宿から出てきたんだって。何でも、生きるのに疲れて気付いたら岬に立っていたそうです。もう死んでしまったほうが楽になれる。そう思った時、赤い光が見えて、バスが迎えに来たと。」

全く一緒だった。

僕も確かに死のうと思って岬に歩を進めていた。その時、赤い提灯を持った老婆が現れたんだ。

「不思議なことにね、皆さん口を揃えて言うのが、美しい女性に会ったと言っんです。白い着物の女性に。あそこの主人は男で、女将

はいなかったはずなのです。従業員もほとんどが男性で、女性従業員は地元のパートタイムとして働く方達ばかり。」

白羽さんのことだとすぐにわかった。僕を出迎えた美しい女性。確かに会っていた。

けど、話と違う点がある。
僕はもう一人会っている。

「あの、僕はもう一人会っています。黒い着物の女性です。黒地に青と黄色の水玉模様をした。名を揚羽と……。」

運転手は、ほほうと唸ってみせた。

「それは珍しい……。私は初耳です。水玉模様とは、まるで幻の揚羽蝶ですな。」

運転手は声高に笑った。

タクシーはホテルの前で停まり、僕は清算を済ませた。もうこの辺もリゾート開発が進んでいるのだろうか。素朴な風景には似合わない立派なホテルだった。

運転手は、ふと何かを思い出したかのように降車する僕らにひっそりと語り掛けた。

「そうそう。あの宿。確か真世庵と言いましたな。でも町民からはそれをもじって迷い庵と呼ばれております。何かに迷った迷い人が最後にたどり着く場所だとか……。何でも、その宿に宿泊した人は近いうちに大きな幸せを掴むという言い伝えもこの町にはありますな。見るところ、あなたは既に……。」

運転手は清算を完了させると車から降りてドアを開けてくれた。

「案外、死を呼ぶ幻の蝶は幸福を運んでくる幻の蝶の間違いだったのかもしれない！」

緑の瞳で僕を見つめながら無邪気に笑う揚羽の姿が甦る。

漆黒色に、艶やかな水玉模様をあしらった着物でヒラヒラと舞いながら、今日もどこかで迷い人を導いているのかもしれない。迷い庵と呼ばれる、最後の地で。

闇夜に紛れて、一人岬に立つ女性の姿。

思い詰めた表情で暗黒の海を覗き込んでいる。

「もし、その御方。」

赤い光が女性を照らした。

「お宿は、もうお決まりですかえ？」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2906d/>

岬の住人

2010年10月14日08時32分発行